

2023年3月の総評に代えて

○林 桂○

●榛野烏梅●(神奈川県 25歳)

よく電話していた声を思いだす
遠くの街の見知らぬバス停

【評】「声を思いだす」が眼目。見知らぬバス停に立って思い出すのは、そこでも繋がることのできるかもしれない電話の声である。もちろん「思いだす」に留まるのだけれど。

●白雲亭入道●(京都府 23歳)

西向きの部屋に光が差し込んだ
めちゃくちゃ泣いた
あとぐらい寝た

【評】昼間を寝て過ごした部屋に西日が射して、夕暮れに目覚める。熟睡感の中に微かな悲しみが残る。

●青野陽●(熊本県 20歳)

「お父さんの死に際に
会えなくていいのね」
残暑のような湿り気だった

【評】「 」は母の電話の言葉だろう。直ぐに帰れない事情を抱えて、離れて暮らす受話器に緊急の電話の音が響く。

● 空いう子 ● (佐賀県 39歳)

空よりも青いロボット夏休み

【評】夏休みの解放感を「空よりも青いロボット」で言う。回想の中での幼い日々の美しさが「青いロボット」になっている。

● 山本先生 ● (東京都 28歳)

日本に生まれて半ズボンを履く

【評】「日本に生まれて」と「半ズボンを履く」の詩的な屈折が心地よい。

● マズルカ ● (山口県 20歳)

不揃いの苺まとめて水洗い
来世はきっと美少女だろう

【評】来世に「美少女」に生まれるのは、不揃いの苳か、それを洗う人なのかは不明。ただ、肯定感に生きている心地よさが伝わる。

● にゃー ● (群馬県 44歳)

コウカキョウの
下の
ポツリとした
心だった。

【評】山崎方代か尾崎放哉を読むような不思議な味わいが「ポツリとした/心だった」にはある。もちえろん「コウカキョウの/下の」のアシストあつてのイメージだが。

● 水木貴奈子 ● (奈良県 25歳)

昼が青白く発光する
ビルディングが受粉して曇っている

【評】「ビルディング」という昔日の表記が効果的。これだけで街並みが古びて見える。

● 加藤 万結子 ● (愛知県 43 歳)

散歩から帰って
眠っている犬よ
明日の朝には
にいちゃんはいないぞ

【評】犬も家族だが、人の動向の詳細は知るはずもない。犬に話しかけながら、家を出て行く「にいちゃん」への惜別の思いは作者にある。

● うろ仔 ● (北海道 27 歳)

漬け込んだ袋の中の鶏肉を
ねるんもろんとあやすのが好き

【評】「ねるんもろん」のオノマトペだけでも充分読ませる。揉み込むのを「あやす」というのも、「ねるんもろん」とよくあっている。

● 花やしき ● (東京都 26 歳)

ねむくない
ぐずぐずこども

よのなかの
ひとのひとりのさみしさをしる

【評】最終行がいい。状況はぐずって寝つかない子どもに添っているのだろう。そのときに生まれる最終行の感懐。

● 秦 大地 ● (東京都 27 歳)

君に綺麗な十円玉をあげる

【評】十円には、十円という貨幣価値の他に美的な綺麗という価値もある。未使用のコインだろう。あげる価値は後者である。

● 有野 水都 ● (東京都 15 歳)

こんなにも鯨つめたい春に居る

【評】鯨は作者を投影したものと言ってしまうと身も蓋もないが、透明な孤独感が清々しい。

● 森 榮太 ● (東京都 17 歳)

蛇のようにやさしい

おまえの首筋が
海に絡むのをここからみてる

【評】「蛇」は、萩原朔太郎や大手拓次の官能性に通じる趣きだが、身を翻した「ここからみてる」は違っている。

● 頼田 昂 ● (神奈川県 19歳)

濡れたアスファルト
白い光が弾けた
うつむく人だけの花火よ
母が言う帰り道

【評】全体的な文脈を理解できたかというとできているとはいいがたい。しかし、線香花火を思わせる「うつむく人だけの花火よ」の一行だけでも、充分美しく、作者の才能を感じさせる。

● サトヤマキュー ● (鹿児島県 16歳)

また僕が夢で死んだと母さんが
りんごの皮を剥きつつ話す

【評】「亡き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり」のように作中で母を殺めた寺山修司の逆バージョンの

ようだ。16歳恐るべし。

* 新らしい募集期を迎えて、新らしい投稿者も増えている。十代の若い投稿者が増えただけでなく、その才能に瞠目させられる。今後を見守りたい。